

日蓮大聖人御書全集

にいけだのござしょうそく

新池殿御消息

新版
2056
ゝ
2061

にいけどのごしようにそく

新池殿御消息

こうあん

ねん

弘安2年('79)

がつ

5月2日

にち

58歳

さい

にいけどの

こめさんごく

おく

た

そうろう

八木三石、送り給ひ候。

いま

いちじよう みようほうれんげきよう

ごほうぜん

そな

たてまつ

今、一乗妙法蓮華經の御宝前に備え奉つて、

なんみようほうれんげきよう

いっぺんとな

そうら

お

南無妙法蓮華經とただ一遍唱えまいらせ候い畢わんぬ。

愛

みこ

りようぜんじようど

けつじよう

うたが

いとおしみの御子を靈山浄土へ、「決定して疑いあるこ

おく

となけん」と送りまいらせんがためなり。

いんが

理

はな

み

そもそも因果のことわりは華と果とのごとし。

せんり

の

か

くさ

はたるび

ひ

ひと

つ

千里の野の枯れたる草に螢火のごとくなる火を一つ付け

ぬれば、須臾に一草二草、十・百・千・万草につきわたしゆゆ いっそうにそう じゆう ひやく せん まんそう 付 渡

燃

じゆつちようにじゆつちよう

そうもくいちじ

焼 尽

りゆう

りてもゆれば、十町二十町の草木一時にやけつきぬ。竜

いったい

みず

て

い

てん

のぼ

さんぜんせかい

あめ

は一滯の水を手に入れて天に昇りぬれば、三千世界に雨を

降

そうろう

しょうぜん

ほけきよう

くよう

たま

ふらし候。小善なれども、法華經に供養しまいらせ給い

くどく

ぬれば、功德かくのごとし。

ほとけ

めつごいつびやくねん

もう

がっしこく

あいくだいおう

もう

仏の滅後一百年と申せしに、月氏国に阿育大王と申せ

おう

いちえんぶだいはちまんしせん

くに

しぶん

いちごちぎよう

し王ましましき。一閻浮提八万四千の国を四分が一御知行

りゆうおう

随

きじん

め

つか

たも

ろくまん

ありき。竜王をしたがえ、鬼神を召し仕わせ給う。六万の

らかん

し

はちまんしせん

せきとう

た

じゆうまんおく

こがね

ほとけ

羅漢を師として八万四千の石塔を立て、十万億の金を仏

くよう たてまつ ちか たま
に供養し 奉 らんと誓わせ給いき。

だいおう いんい くどく 尋
かかる大王にておわせしその因位の功德をたずぬれば、

つち もちいひと しゃかぶつ くよう たてまつ ゆえ
ただ土の餅一つ釈迦仏に供養し 奉 りし故ぞかし。

しゃかぶつ おじ こくぼんおう もう おう か おう たい
釈迦仏の伯父に斛飯王と申す王おわします。彼の王に太

し あなりつ 名 たいしう たま ごきひと
子あり、阿那律となづく。この太子生まれ給いしに、御器一

も い か ごき はん じき い 来
つ持ち出でたり。彼の御器に飯あり。食すればまた出でき、

い 来 つい はん 尽 ゆえ 彼 たいし
また出でき、終に飯つくることなし。故に、かの太子の

幼 な によい 名 ほけきよう ほとけ な たも
おさな名をば如意となづけたり。法華経にて仏に成り給う

ふみようによらい
普明如来これなり。

この太子の因位を尋ねれば、うえたる世にひえの飯を

しゃくしぶつ

もう

そう

くよう

ゆえ

しゃくしぶつ

くよう

辟支仏と申す僧に供養せし故ぞかし。辟支仏を供養する

くどく

ほけきよう

ぎようじゃ

くよう

功德すら、かくのごとし。いわんや、法華經の行者を供養

くどく

むりようむへん

ほとけ

くよう

まい

くどく

すぐ

せん功德は、無量無辺の仏を供養し進らする功德にも勝れ

そろうろ

て候なり。

にちれん

にほんこく

もの

くに

なんえんぶだいしちせん

そもそも日蓮は日本国の者なり。この国は南閻浮提七千

ゆじゆん

うち

はちまんしせん

くに

なか

がっしこく

もう

くに

由旬の内に八万四千の国あり。その中に月氏国と申す国は

たいこく

か

くに

ごてんじく

じゆうろく

たいこく

ごひやく

大国なり。彼の国に五天竺あり。十六の大国・五百の

ちゆうこく

じゆうせん

しやうこく

むりよう

ぞくさんこく

とうかい

中国・十千の小国・無量の粟散国あり。それより東海の

なか こじま にほんこく

ちゅうてんじく じゅうまんより

中に小島あり。日本国これなり。中天竺よりは十万余里の

ひがし ぶつきよう ほとけめつど のち しょうほういつせんねん あいだ てんじく

東なり。仏教は仏滅度して後、正法一千年が間は天竺

留 よこく 渡 しょうほういつせんねん まつ ぞうほう い

にとどまりて余国にわたらず。正法一千年の末、像法に入

いちじゅうごねん もう かんど わた かんど さんびやくねん 過

つて一十五年と申せしに、漢土へ渡る。漢土に三百年すぎ

ひやくさいこく わた ひやくさいこく いっぴやくねん いじょういつせんしひやくじゅうごねん

て百済国に渡る。百済国に一百年、已上一千四百十五年

もう にんのうさんじゅうだいきんめいてんのう みよ にほんこく はじ

と申せしに、人王三十代欽明天皇の御代に、日本国に始め

しやかぶつ こんどう ぞう いつさいきよう わた そうろう いま

て釈迦仏の金銅の像と一切経は渡つて候いき。今、

しちひやくよねん およ そうろう

七百年に及び候。

あいだ いつさいきよう ごせんよかん しちせんよかん しゅう

その間、一切経は五千余巻、あるいは七千余巻なり。宗

はつしゅう くしゅう じつしゅう くに ろくじゅうろつかこく ふた しま かみ

は八宗、九宗、十宗なり。国は六十六箇国・二つの島、神

さんぜんよしや ほとけ いちまんよじ なんによ そうに はんぶん

は三千余社、仏は一万余寺なり。男女よりも僧尼は半分に

およ ぶつぼう はんじょう かんど すぐ てんじく 勝

及べり。仏法の繁昌は、漢土にも勝れ、天竺にもまされり。

ぶつぼう い じょうろん じょうどしゅう ひとびと

ただし、仏法に入つて諍論あり。浄土宗の人々は

あみだぶつ ほんぞん しんごん ひとびと だいにちによらい ほんぞん

阿弥陀仏を本尊とし、真言の人々は大日如来を本尊とす。

ぜんしゅう ひとびと きょう ほとけ さしお だるま ほんぞん

禅宗の人々は経と仏とをば閣いて達磨を本尊とす。

よしゅう ひとびと ねんぶつしや しんごんとう したが

余宗の人々は念仏者・真言等に随えられ、いずれともなけ

強 したが たぶん お あみだぶつ ほんぞん

れども、つよきに随い、多分に押されて、阿弥陀仏を本尊

げんざい しゅ し しん しゃかぶつ さしお たにん

とせり。現在の主・師・親たる釈迦仏を閣いて、他人たる

あみだぶつ じゅうまんおく たこく 逃 い 由 ゆ 願 がん

阿弥陀仏の十万億の他国へにげ行くべきよしをねがわせ

たま そうろう

給い候。

あみだぶつ おや しゅ し いっきよう

阿弥陀仏は、親ならず、主ならず、師ならず。されば、一經

うち そらごと しじゅうはちがん た たま おろ ひとびと

の内、虚言の四十八願を立て給いたりしを、愚かなる人々

まこと おも ものくる かね ひようし 叩 踊 跳

実と思つて、物狂わしく金・拍子をたたき、おどりはねて

ねんぶつ もう おや くに 厭 い らいごう やくそく

念仏を申し、親の国をばいとい出でぬ。来迎せんと約束せ

あみだぶつ やくそく ひと きた ちゆうう 旅 そら まよ

し阿弥陀仏の約束の人は来らず、中有のたびの空に迷つて、

ほうぼう ごう 引 さんあくごう もう ごくや 赴 ごくそつ

謗法の業にひかれて三悪道と申す獄屋へおもむけば、獄卒

あぼうらせつよろこ 捕 擲 苛 かぎ

の阿防羅刹悦びをなし、とらえからめてさいなむこと限り

なし。

粗々 きょうもん まか

語 もう

にほんこく

これをあらあら経文に任せてかたり申せば、日本国の

なんによしじゅうくおくくまんしせんはつぴやくにじゅうはちにん

それがしひとり

男女四十九億九万四千八百二十八人ましますが、某一人

ふしぎ もの おも

よ しじゅうくおくくまんしせんはつぴやく

を不思議なる者に思つて、余の四十九億九万四千八百

にじゅうしちにん みなかたき な しゅ し しん しゃくそん 用

二十七人は皆敵と成つて、主・師・親の釈尊をもちいぬ

ふしぎ

罵

打

だに不思議なるに、かえりて、あるいはのり、あるいはうち、

ところ

お

ざんげん

るざい

しざい

おこな

あるいは処を追い、あるいは讒言して流罪し死罪に行わ

ひん

もの

と

諂

いや

もの

たつと

るれば、貧なる者は富めるをへつらい、賤しき者は貴きを

あお

ふぜい

たぜい

随

ほけきよう

仰ぎ、無勢は多勢にしたがうことなれば、たまたま法華経を

しん ひとびと せけん 憚 ひと おそ たぶん

信ずるようなる人々も、世間をはばかり人を恐れて、多分は

じごく お ふびん

地獄へ墮つること不便なり。

にちれん ぐげん しゆくじゆう

ただし、日蓮が愚眼にてやあるらん、また宿習にてや

そうろう ほけきよう もつと だいいち いこんとうせつ なんしんなんげ

候らん。「法華経は最も第一なり」「已今当説に難信難解

われひとり よ くご と そうろう

なり」「ただ我一人のみ、能く救護をなす」と説かれて候

もん によらい けんげん わたくし ことば

文は如来の金言なり。あえて私の言にはあらず。

とうせい ひと ことば によらい きんげん う おも

当世の人は人師の言を如来の金言と打ち思い、あるいは

ほけきよう かた なら ひと おも すぐ

法華経に肩を並べて斉しと思ひ、あるいは勝れたり、ある

おと き 叶 おも

いは劣るなれども機にかなえりと思えり。

によらい しようぎよう ずいたい ずいじい もう

しかるに、如来の聖教に随他意・随自意と申すことあ

たと こ こころ おや したが ずいたい もう おや こころ

り。譬えば、子の心に親の随うをば随他意と申す、親の心

こ したが ずいじい もう しようきよう ずいたい ほとけ

に子の随うをば随自意と申す。諸経は随他意なり。仏、

いっさいしゅじよう こころ したが たも ゆえ ほけきよう ずいじい

一切衆生の心に随い給う故に。法華経は随自意なり。

いっさいしゅじよう ほとけ こころ したが しようきよう ぶっせつ

一切衆生を仏の心に随えたり。諸経は仏説なれども、

しん しゅじよう こころ なが ほとけ ほけきよう

これを信ずれば、衆生の心にて永く仏にならず。法華経

ぶっせつ ぶっち いちじいつてん ふか しん

は仏説なり、仏智なり。一字一点もこれを深く信ずれば、我

みすなわ ほとけ

が身即ち仏となる。

たと しらかみ すみ そ くら くらうるし しろいもの い

譬えば、白紙を墨に染むれば黒くなり、黒漆に白物を入

しろ

どくやくへん

くすり

しゅじようへん

るれば白くなるがごとし。毒薬変じて薬となり、衆生変じ

ほとけ

ゆえ みようほう もう

て仏となる。故に妙法と申す。

いま ひとびと たか いや

げんざい ちち

しかるに、今の人々は、高きも賤しきも、現在の父たる

しゃかぶつ

軽 たにん えん

あみだ だいにちとう おも

釈迦仏をばかるしめて、他人の縁なき阿弥陀・大日等を重ん

たてまつ

ふこう とが

ほうぼう ひと

じ奉るは、これ不孝の失にあらずや、これ謗法の人にあ

もう

にほんこく ひといちどう あだ たも

らずやと申せば、日本国の人一同に怨ませ給うなり。それ

理

曲

き 素直

なわ 憎

もことわりなり。まがれる木はすなおなる縄をにくみ、

偽

もの 正

まつりごと

ましろ

合

おも

いつわれる者はただしき 政をば心にあわず思うなり。

わ

ちよう ちんおうくじゆういちだい あいだ むほん ひとびと にじゅうろくにん

我が朝、人王九十一代の間に、謀叛の人々は二十六人な

おおやまのみこ おおいしのこまる ないしまさかど 純 友

り。いわゆる、大山王子・大石小丸、乃至将門・すみとも・

あくさふとう

ひとびと

よしの

十津かわ

さんりん

籠

悪左府等なり。これらの人々は、吉野・とつ河の山林にこも

つくし

ちんぜい

かいちゆう

かく

しまじま

夷

うらうら

り、筑紫・鎮西の海中に隠るれば、島々のえびす、浦々の

武士

打

たつと

しょうにん

もののふどうたんとす。しかれども、それは貴き聖人、

やまやま

てらでら

やしろやしろ

ほつし

あま

によにん

甚

かたき

おも

山々・寺々・社々の法師・尼、女人はいとう敵と思うこ

となし。

にちれん

じょうげ

なんによ

あま

ほつし

たつと

しょうにん

い

日蓮をば、上下の男女、尼・法師、貴き聖人など云わ

ひとびと

こと

かたき

そうろう

ゆえ

ごせ

る人々は、殊に敵となり候。その故は、いずれも後世

ねが

なんによ

そうに

ねが

よし

見

そうら

かれ

をば願えども、男女よりは僧尼こそ願う由はみえ候え。彼

おうじよう

こんじよう

よ

渡

仲立

らは往生はさておきぬ、今生の世をわたるなかだちとな

ゆえ

る故なり。

ちしや しょうにん

われよ

われすぐ

もう

ほんし

智者・聖人、また「我好し」「我勝れたり」と申し、本師

あと もう

しよりよう

もう

みようもんりよう

おも

実

の跡と申し、所領と申し、名聞利養を重くしてまめやか

どうしん

かる

ぶつぼう

僻様

こころえ

ぐち

ひと

に、道心は軽し。「仏法はひがさまに心得て、愚癡の人な

ほうぼう

ひと

いごば

お

ひと

はばか

まさ

り、謗法の人なり」と言をも惜しまず、人をも憚らず、「当

し

ひと

ぶつぼう

なか

あだ

きんげん

おそ

に知るべし、この人は仏法の中の怨なり」の金言を恐れて、

われ

せそん

つか

しゆ

しよ

おそ

「我はこれ、世尊の使いなり。衆に処するに畏るところ

もん

まか

甚

責

え

なし」という文に任せていたくせむるあいだ、「いまだ得ざ

おも　え　がまん　こころ　じゅうまん　ひとびと
るを謂つて得たりとなし、我慢の心は充滿せん」の人々、

憎　そね
いかでかにくみ、嫉まざらんや。

にちれんほど　てんじんしちだい　ちじんごだい　にんのうくじゅうよだい
されば、日蓮程、天神七代・地神五代・人王九十余代に、

ほどほけきよう　ゆえ　さんるい　てきじん　怨　もの

いまだこれ程法華經の故に三類の敵人にあだまれたる者な
きなり。

じようげばんにんいちどう　憎　もの　そうろう

かかる上下万人一同のにくまれ者にて候に、これまで

おんわた　そうら　えん　しゆくせ　ふぼ

御渡り候いしこと、おぼろけの縁にはあらず。宿世の父母

むかし　きようだい　ゆえ　おも　つ　たも

か昔の兄弟にておわしける故に思い付かせ給うか。また、

かこ　ほけきよう　えんふか　こんどほとけ　たも　種

過去に法華經の縁深くして、今度仏にならせ給うべきたね

の熟せるかの故に、在俗の身として世間ひまなき人の、
くじ おも い たま

公事のひまに思い出ださせ給いけるやらん。

うえ とおとうみのくに こうしゅうは きい のこうみ のぶさん

その上、遠江国より甲州波木井郷身延山へは、道

さんびやくより およ しゆくしゆく 鬱 愴 みね のぼ にちがつ

三百余里に及べり。宿々のいぶせさ、嶺に昇れば日月を

たに くだ あな い おぼ かわ みず や い

いただき、谷へ下れば穴へ入るかと思ゆ。河の水は矢を射る

はや たいせき 流 じんば向 がた ふね 危

がごとく早し。大石ながれて人馬むかい難し。船あやうく

かみ みず 浸 おとこ やま 人 おんな やまうば

して紙を水にひたせるがごとし。男は山がつ、女は山母の

みち なわ 細 き くさ 繁

ごとし。道は縄のごとくほそく、木は草のごとくしげし。

ところ たず い たま そうろう しゆくじゅう

かかる所へ尋ね入らせ給いて候こと、いかなる宿習な

しやかぶつ

みて

ひ

たいしやく

うま

ぼんのう

み

るらん。

釈迦仏は御手を引き、

帝釈は馬となり、

梵王は身

したが

にちがつ

まなこ

成

替

たま

い

たま

に随い、

日月は眼となりかわらせ給いて入らせ給いける

有

難

にや。ありがたし、ありがたし。

こととおお

もう

かぜ起

みくる

そうろう

事多しと申せども、このほど風おこりて身苦しく候あ

とど

そつら

お

いだ、留め候い畢わんぬ。

こうあんになんつちのとうごがつふつか

弘安二年己卯五月二日

にいけどのごへんじ

新池殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押